

「どの先生に

弟子入りする？」

模写をすることで、先人たちに問いかけを繰り返した。

黄表紙を解体し、模写し、装丁して、書物のモノとしての特徴を理解したり、デジタルアーカイブの海を探索して江戸時代〜明治の絵手本を模写し、いにしへの絵師たちの筆致を学んだり……古典籍をひらくと、いつでも偉大なる先生たちが待っていた。過去との対話をとおしてつかんだ、松平莉奈にとつての「古典」とは。

Matsudaira Rina

松平 莉奈

画家



AIR就任期間 2018年10月～

松平莉奈 紹介ページ

https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/matsudaira/utsushinonarai/index.html



兵庫県生まれ。2014年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻日本画修了。「他者について想像すること」をテーマに、人物画を主とした絵画を制作。主な展覧会に、個展「悪報をみる—日本霊異記を絵画化する—」KAHO GALLERY / 京都 (2018)、個展「insider-out」第一生命ギャラリー / 東京 (2017) など。賞歴に「京都府文化賞奨励賞」(2020)、「京都市芸術新人賞」(2017)、「VOCA展」佳作賞(2015) など。



松平莉奈
『『金々先生栄花夢』
模写』(2019年)

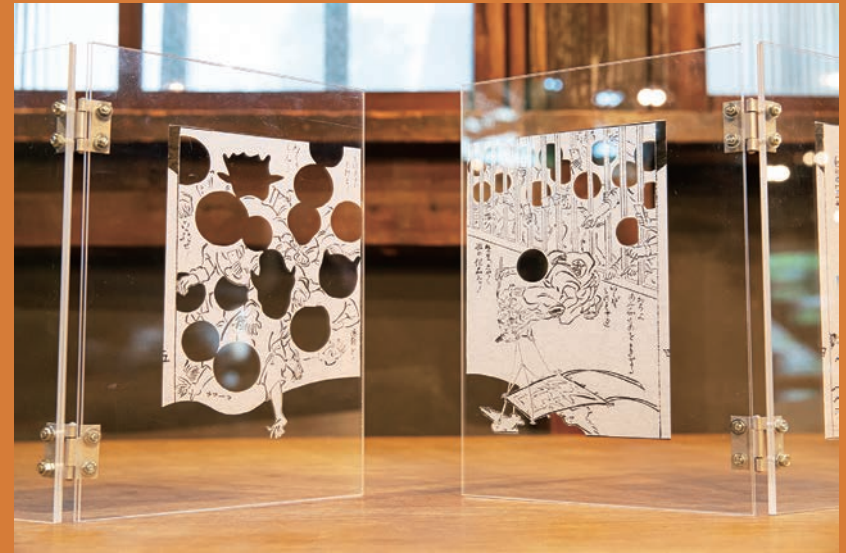
模写作品(和紙、墨、染料、糸)ワークショップで、当館蔵『金々先生栄花夢』(96頁)の複製本(参考展示)を元にした模本(コピー用紙製、『金々先生栄花夢』の複製を一度解体し、スキャンしたデータをコピー用紙に印刷した「製本キット」を製本したもの)を作り、それをまた解体し、上げ写しの手法で模写を行い、製本した写本。



松平莉奈「デジタルアーカイブ模写をするときの準備物」(2020年)

模型(パソコン、筆、絵皿、雑巾、墨液、スポイト:段ボール・紙 筆洗:プラスチック、模写見本:和紙・墨) 2020年11月に開催した個展「松平莉奈展 うつしのならび ー絵描きとデジタル・アーカイブー」(於ロームシアター京都)での展示に耐えるよう、段ボールや紙で、松平氏の机上を表現した作品。なお、使用する道具やデジタルアーカイブ模写の方法の詳細は、サイトで公開されている(95頁)。

古典がもっと自由になる
元々古典モチーフを意識的に扱っていた松平さんは、以前、黄表紙『金々先生栄花夢』(96頁)を題材にした「菌菌先生」(二〇一七年)を発表しています。
当時は『金々先生栄花夢』の吹き出しのような表現に関心がありました。さらに深く黄表紙の世界を探るべく、ために、黄表紙の製本と模写に取り組み、書物がどのようなパーツでできているのか、どのような工程を経て冊子の形になるのか……などを、身体的に理解してゆきました。



松平莉奈「作者の手の内夢の内」(2019年)

絵画作品(和紙、アクリル板、墨)

戯作者が現代へタイムスリップし、作品の面白さで人気者になるが、次第に他者の期待が過剰になり……という筋。黄表紙の全盛期の短さに、現代のSNS文化の在り方を重ねる。「5丁1冊」「袋綴」などの構造に着目し、黄表紙を製本する前のような形に仕立てた。なお戯作者の顔の穴は、黄表紙において〇で顔を表す手法(62頁【長塚14】)と、戯作の手法「穴をうがう(誰も気づかないことを鋭く指摘する)」に拠る。(有澤知世)

松平 15 -KINBE-



松平 16 -OMAZU-



松平 17 -GENSHIRO-



松平 18 -MANPACHI·GUICHI-



松平莉奈「金々先生夢のTOKYO REMIX」シリーズ (2021年)
(-KINBE-/-OMAZU-/-GENSHIRO-/-MANPACHI·GUICHI-)

絹本着色(絹本、墨、染料、岩絵具)、455mm×530mm

作品はそれぞれ、黄表紙『金々先生栄花夢』(96頁)の登場人物名を冠する人物画ではあるが、黄表紙の文学史的な情報や特徴的な描写方法をいったん排し、陶器のような肌の質感や柔らかい描線、特徴的な表情といった松平作品らしさを全面に出す。背景には『金々先生栄花夢』中の名台詞と、iPhoneの絵文字等を模倣的に配した。ワークショップや模写をとおして習得した「古典」なるものが、自身の表現と自然に溶け合うことを目指した意欲作。

松平 10



松平莉奈「デジタルアーカイブ模写『九老画譜』」(2020年)・
「デジタルアーカイブ模写『福善斎画譜』」(2020年)

模写作品(和紙・墨、ポスター表装)

絵手本(絵の教科書)のデジタルアーカイブ画像を模写し、さらに、手本とした絵手本についての情報、松平氏による解説、実践した模写の方法などを記してポスター状に仕立てた。松平氏が提唱する「デジタルアーカイブ模写」は、WEB上で公開されているアーカイブ画像を活用することで、だれでも、いつでも、どこでも、いにしへの先生たちに弟子入りし、絵を学ぶことができるという趣旨で考案された。

の雰囲気や、筆をとおして知ることができると思います。
古人との「対話」をもっと気軽にするために提案したのが「デジタルアーカイブ模写」。
WEB上で見られるアーカイブ画像にアクセスして模写を行うとどうなるだろうか? という実験です。五十点もの模写を行い、いにしへの先生たちと向き合った松平さんは、現代を生きる自分と「古典」との距離感を自然に感じられるようになったといいます。自由な表現へと立ち返り挑む「金々先生夢のTOKYO REMIX」です。

ワークショップを経て

黄表紙の製本や模写をとおし、書物の構造の理解を深めた後、黄表紙が生まれた背景を探るため、洒落本(遊里を舞台にした会話体の読み物)などを手がかりに、遊里ではぐくまれた「通」という美意識を探り、「作者の手の内夢の内」の創作に至った。

その時の体験から、模写を通じて過去の時代を理解したいと考え、デジタルアーカイブ模写を考案。日々進歩する古典籍のデジタルアーカイブやその活用方法について、研究者と行った議論が活かされた。



松平莉奈「『金々先生栄花夢』模写」の全貌

https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/matsudaira_handwriting_copy.pdf



松平莉奈の「近世近代絵手本デジタルアーカイブを絵手本として利用するサイト」

<https://ehonlist.matsudairarina.com/>

※デジタルアーカイブ模写の詳細な方法や、絵手本のデジタルアーカイブについての情報を紹介



デジタルアーカイブ模写の実践動画「どの先生に弟子入りする？」

<https://www.youtube.com/watch?v=G-WhRzcjHbg&feature=youtu.be>



古典インタプリタ日誌(ワークショップ詳細)

<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary/index.html#matsudaira>



デジタルアーカイブ模写作品(92頁)の各絵手本についての情報

○紀梅亭「九老画譜」(1797年刊)

<https://ehonlist.matsudairarina.com/posts/11449289>

○丹羽嘉言「福善斎画譜」(1814年刊)

<https://ehonlist.matsudairarina.com/posts/11449673>



①「金々先生栄花夢」のレプリカを活用して黄表紙の製本を行う。②「デジタルアーカイブ模写」による作品と、模写を行うための準備物の展示風景。
③葛飾北斎「略画早指図」を手本にデジタルアーカイブ模写し、その様子を生配信した。④ワークショップでさまざまな形の古典籍に触れた。

松平 5



よしわらせいろねんじゅうじ
『吉原青楼年中行事』 十返舎一久作・喜多川歌麿画 享和4年(1804)刊 半紙本 2冊

吉原の慣例や行事、遊客の心得などについて、美しい絵画と文章で綴った一書。上之巻には「仲の町年礼之図」、「仁和嘉之図」等の十図、下之巻には「八朔之図」「餅つき之図」などの九図が彩色摺りで備わり、当時の吉原の風俗が生き生きと描かれる。下之巻「信鋪張付彩工図」は、歌麿自身と思われる絵師が、妓楼の壁に鳳凰の絵を描く場面で、当時の画師が用いた画材が知られる点でも興味深い。(有澤知世)

Commentary

松平 2



きんきんせんせいえいがのゆめ
『金々先生栄花夢』 恋川春町作・画 安永4年(1775)刊 中本 2巻2冊

黄表紙の祖。簡素な絵本である「草双紙」の形式に、花柳界の風俗を写實的に描き当時第一線の文芸であった「洒落本」の性格を与えて、大人向けとした記念碑的作品。社会的地位のある知識人が戯名を使って執筆し、仲間内で楽しむ文芸として成立し、30年間江戸で出版された。「金々」は「最新流行」の意の流行語で、田舎の青年が江戸で富豪の養子となり、通人ぶって豪遊する様子を滑稽に描く。(有澤知世)

Commentary



こうりんがふ
『光琳画譜』

中村芳中画
享和2年(1802)刊
大本 2巻2冊

尾形光琳に私淑した中村芳中が、光琳のモチーフ集としてまとめたもの。まるで筆で描いたかのような墨の描線やたらし込みの表現など、版元・金花堂(近江屋与兵衛)が当時の印刷技術を駆使した、版本としての最高峰に位置しよう。全体として丸みを帯びたタッチにより、人物や神仙、動植物などが淡い色合いで描かれ、背景を極力排し、余白をも絵の一部として読者の目を楽ませる。国文研蔵本は「六歌仙」図に押圧による空摺りが用いられる初印本と見られる。(木越俊介)



『唐詩選画本』

橘石峰、鈴木芙蓉他画
天明8年(1788)~天保7年(1836)刊
半紙本 7編35冊

折からの画譜の流行に乗り、唐詩のアンソロジーである『唐詩選』を絵本化したもの。既に『唐詩選』の国字訳の企画を成功させていた版元・嵩山房(小林新兵衛)は、その中の『唐詩選国字解』を本書の詩解部分にふんだんに利用している。また、初編から六編までは全て異なる絵師が手がけているが、初・二・四編の絵には中国の画譜『八種画譜』のうちの唐詩を材としたものからの影響が強い。本書が立案された背景には、当時の『小倉百人一首』の絵入本の流行があったことが、初編の序跋などから窺える。(木越俊介)

小論文

画譜のゆくえ

—— 絵手本について ——

Kigoshi Shunsuke

木越 俊介

国文学研究資料館
准教授

画譜とは何か。小林宏光「中国版画史論」(二〇一七)には、「まず絵画技法を図解した画法書の意となり、基本的に挿絵版画が不可欠の要素で、これに画論や絵画制作法をとめない、時に画史、画家伝をそなえ、絵画学習、実制作に役立つ内容の歴史的な書物を指す」という、簡にして要を得た定義が備わる。さらに「加えて、やや広義にとらえ、画論や画法をともなわなくとも、直接或いは間接に、絵画制作、鑑

賞に有効な内容を持つものも含む」とされ、その示す範囲は思いのほか広い。以下、手短に日本における画譜について記すが、本場・中国における画譜の展開については小林前掲書に詳しいのでそちらをご参照いただきたい。

さて、画譜は明清代の中国で盛んに出版されたのだが、日本にはいかなる影響を与えたのだろうか。たとえば、明末の万曆三十五年（一六〇七）刊『図繪宗彝』は同じ世紀内には日本に輸入され、元禄十五年（一七〇二）に至ると和刻本が刊行される。また、清初に刊行された王概等撰『芥子園画伝』（初集・六七九年刊）は一七〇一年に刊行された二、三集とともにやはり輸入され和刻本が刊行される。同時に、清から日本へ来た画家による影響も大きく、沈南頻（一六八二〜？）などは日本における南画の広まりにおいて逸することのできない重要な存在である。

し、京都では円山派や四条派の画家の画譜が多く刊行され、十九世紀に入ると色刷の美しさが一際目を引くものが増える。中でも『光琳画譜』は、尾形光琳（一六五八〜一七二六）の筆を印刷によって再現しようとする意気込みが窺えるとともに、当時の印刷技術の粋を集めた、絵本史に残る傑作である。この後も画譜はさらに多様に展開するのだが、おおまかな傾向としては、一人の画家のエッセンスを堪能できる画集のような形態のものが増える。江戸後期の、浮世絵以外の絵を知りたい向きには、あたかも現代の美術界におけるポートフォリオのような役割をも果たしてくれるかもしれない。

画譜は印刷された複製物であるという点や書物という形態など、一枚絵に比すれば美術品としてやや軽く扱われてきた側面は否定できない。しかし、絵本（絵入本）という様式自体に注目が集まるようになって

このように当初は受容を専らとする立場にとどまっていたが、やがて日本独自の画譜制作が試みられるようになり、そこには中国由来の南画と日本の狩野派などの大和絵とが併載されることとなる。その初期の代表的画譜が、正徳二年（一七二二）刊の林守篤画『画筌』であり、この時期以降、とりわけ大坂において和製画譜が盛んに刊行される。守篤と同様、狩野派に学んだ橋守国（一六七九〜一七四八）も『絵本写宝袋』（享保五年（一七二〇）刊）をはじめ、多くの絵手本を手がけている。

また、花鳥画譜である『明朝紫硯』（延享三年（一七四六）刊）は、『芥子園画伝』を模倣した書であるが、和製画譜としては初めての多色刷りであり、画譜の展開が印刷技術の発達とともにあったことも忘れてはならない。

十八世紀後半以降の画譜は百花繚乱の様相を呈した今日では、その評価の高まりとともに研究も盛んに行われるようになっていく。そして、こうした画譜を見るにはデジタル・アーカイブが格好の道案内役となってくれることだろう。もちろん、実物を手に取ることが一番であることはいうまでもないが、実際にはそれが叶わないことが多いし、残念ながら、美術館における展示などでは、本という形態ゆえに一冊につき見開き一丁（二頁に相当）という制約がつきまとう。かたやデジタル上の本は、お好みの画譜を探し、めくりながら（クリック、スワイプしながら）画家の筆遣いを堪能するもよし、模写するもよし、比べるもよし、自由に開かれていく。

今後、画譜はこれまで以上に私たちの身近なものとなっていくはずである。

「投企する古典性」としての 「ないじえる芸術共創ラボ」

飯倉 洋一



Profile

飯倉 洋一 Ikura Yoichi

大阪大学大学院文学研究科教授。九州大学大学院博士後期課程中退。同大学助手、山口大学助教授などを経て現職。博士(文学)。主な編著書に『秋成考』(翰林書房、2005年)、『上田秋成 絆としての文芸』(大阪大学出版会、2012年)、『前期読本怪談集』(国書刊行会、2017年)など。

「ないじえる芸術共創ラボ」は、普段私たちが研究対象としている古典籍を、芸術家の創造の材料あるいは契機にしてもらうため、研究者がそれに関わって芸術を共創するというプロジェクトだと理解している。古典籍を活かし、研究者にも芸術家にもプラスとなるのが理想。私が少しでも関わった限りでは、それは上手くいったという印象を持っている。

ないじえる芸術共創のコンセプトは、「投企する古典性」(私なりの解釈では、古典を未来志向で考えるプロジェクト)という、私も参加させていただいた日文研の荒木浩教授企画のプロジェクト(二〇一六年度〜二〇一九年度)と親和性が大きいと感じている。その親和性の象徴がA-I-Rの一人である松平莉奈さん(とその絵)である。松平さん自身、荒木プロジェクトに参加し、発表もしているが、「投企する古典性」プロジェクト成果として世に問われた「古典の未来学」(文学通信、二〇二〇年)という分厚い本の表紙の絵を描いて話題になった。その原画が、二〇二〇年十一月に行われた、

松平莉奈展「うつしのならび」絵描きとデジタルアーカイブ」で特別展示されていた。

「うつしのならび」は、国文研の古典籍画像データベースに載せられている画像を中心に、江戸時代の絵手本数十種を選び、松平さん自身が、それを模写した絵を展示したものだ。模写の技術もさることながら、興味深かったのは、模写する対象の選択だった。現代画家である松平さんの創造力のアンテナがとらえた絵がそこには並んでいた。その場に、「古典の未来学」の表紙絵は、実によくマッチしていた。

遡って二〇一八年の七月のこと、古典インタプリタの有澤知世さんから連絡があり、十八世紀の江戸文芸、とくに雅俗概念について、松平さんにレクチャーをしてほしいという依頼があった。荒木プロジェクトで知り合っていたこともあって、松平さんが指名してくださったとのこと、私は一〇〇枚以上のスライドを準備した。ところが雅俗の概念は、図式的に説明すると一見簡単なのだが、「筋縄ではいかないところがある。普段の授業ではさらっと説明するところ

るを、私は自分なりに少し突き詰めて考えたために、わかりにくい説明になってしまった。ないじえる芸術共創の場だからこそ、私は現代において、十八世紀の雅俗観がどういう意味を持つのか、あるいは現代の目から十八世紀の雅俗観はどう見えるのかを意識せざるを得なかった。それが私を混乱させたのであるが、研究者の混乱とは、新たな問いの発生に他ならない。私はそこから新たな雅俗論の手がかりを得た気がする。松平さんに何かヒントを与えられたらどうか。

研究者と芸術家の共創を、短期間の試みで終わってしまうたら、その可能性も小さな波で終わってしまうだろう。うまくいかない時もあるかもしれないが、共創を持続的に行うことによって、広く、深く、多様な試みが可能となり、小さな波がビッグウェーブとなるだろう。その結果、研究にも芸術にも、新たな地平が拓かれるはずだ。そのためには、是非、この事業の国文研全館挙げての、持続的な取り組みをお願いする。